（研究ノート）

学生参加型授業の試み
—2005年度「福祉経済論」における学生たちの多彩な報告—

川口　啓子

A Trial on a Class with Students' Positive Participation: Various Presentations by Students at "Welfare Economics"

Keiko Kawaguchi

要約

筆者の担当科目である「福祉経済論」の授業で、学生参加型授業を試みた。
その要は、ゼミ別学生グループの報告に思い切った時間を与え、学生たちに授業を進めさせたことである。そこには、教員側の"仕掛け"を要するのだが、学生たちはいわゆるレジュメと板書による報告ばかりでなく、教員の予想を遙かに超えて、アンケート、インタビュー、ビデオ・スライド制作、模擬授業など、独自な方法で多彩な授業展開を行った。

結果は、学生たちがそれぞれに工夫を凝らした報告を行い、参加度の高い授業となった。また、その準備のためにゼミ別に集まり、学生が自発的に学ぶ関係を構築していった。また、学生たちで授業を進めることによって、教員の一方的な講義に比べて、完璧とは言えないまでも私語、居眠り、ケータイ、内職が減り、授業に参加する空気が生まれてきた。もちろん、今後の課題は多々あるが、学生と学生、教員と学生との呼応関係を軸に学生参加型授業を追求する意義は大きいと思われる。

キーワード：参加　呼応　ゼミ別学生グループ"仕掛け"報告

2005年10月6日受理（教育研究）

はじめに

昨今の教育事情のめまぐるしい変化とともに、大学の授業の在り方を巡っては、多くの大学で授業改善に関する研究がなされ、個々の教員に授業の刷新を迫るようになった。

筆者も例外ではなく、担当科目である「福祉経済論」の授業には過去二年間とも不満足感を残す結果となり、授業の刷新が迫られていた。とりわけ、学生の学習意欲を引き出しきれていないこと、授業への参加度が低いこと（単なる出席ではなく）、グループワーク方式をとったにも関わらず学生が自発的に学び合う関係が構築されていないことである。そのため、授業を通して学生と学生、教員と学生とが呼応しあっていないといういらだちを感じていた。

以上のような経験をふまえて、2005年度は、Ⅰ）学生が自発的に学び合う関係を構築する、Ⅱ）学生の学習意欲を引き出し、Ⅲ）授業への参加度を高める、ということを課題に授業の刷新に取り組んだ。その方法としてゼミ別学生グループの報告を中心とした授業とし、学生自身で授業を構成できるように"仕掛け"てみた。結果、2003年度、2004年度に比して学生が授業に参加する手応えが得られた。

そこで、本稿では筆者の「福祉経済論」2005年度の授業を中心に分析を試みる。きわめて限定的な経験則の域を出ない分析ではあるが、少なからず学生参加型授業への発展的課題を含み、研究ノートとして発信する意義は充分にあると考える。

第１章　「福祉経済論」と受講生の概要

第１節　科目の位置づけと概要

大阪健康福祉短期大学（以下、本学）のカリキュラムは、介護福祉士養成指定科目73単位に本学独自科目（必修及び選択科目８～18単位）で編成され、要卒単位は81単位である。その中で、「福祉経済論」は専門分野に位置づけられた独自の選択科目（2単位）である。現在、二回生配当（前期）で、授業回数は試験を含めて15回である。

本稿の分析対象は、2005年度昼間部[1]（2年課程）二回生授業で、筆者にとっては三年目の授業にあたる。シラバスの概要は下記の通りである。

＜目標＞自分を取り巻く経済社会について認識を広げる。福祉領域の制度や実践がなぜ必要なのかを経済社会の構造から考える。介護福祉士（福祉労働者）として働くことの意味を考える。

＜テキスト＞『豊かさの条件』輝峻淑子（岩波新書）2003年。

＜授業方法＞講義、グループワーク－発表、レポート。

＜評価方法＞試験（レポートor筆記）、出席、授業態度、グループワーク課題の水準、発表・報告の態度（総合評価）。

尚、授業方法については本稿全体を通じて詳細を述べることとする。

第２節　登録学生の概要

「福祉経済論」登録者数は2003年度45名、2004年度55名、2005年度54名である。この集団の特徴と、特徴から導き出される授業展開のための条件は次のようなものである。

ｉ）2005年度を例にとると、昼間部二回生全70人のうちの77.1%が受講し、結果的には6つのゼミ[2]から8～10名ずつの登録があった（2003年度、2004年度も同様の傾向である）。したがって、ゼミ別グループワークが行いやすいという条件がある。

ii）10代の現役学生が大半だが、20～60代までの社会経験を有する学生も存在し多様性に富み、全員が介護福祉士資格の取得という比較的明確な目的意識を持って一回生時の学習（実習も含む）を修了しているため、一定の社会的問題意識も培われている。

iii）小規模な短大で（昼間部1学年定員60名）学生生活2年目に入り互いに名前と顔が一致するばかりではなく、1年間の学生生活を通じて多少とも知り合いコミュニケーションのとれる集団である。したがって、互いに触発されやすい。

以上の3点は、年度が変わってもほぼ共通する特徴であり条件である。したがって、教員に問われるのはこれらの生かし方となる。そこで、学生が思わず参加してしまい学んでしまう“仕掛け”をなんとか潜ませようと取り組んだのが、次章以降で紹介する2005年度の授業である。

第２章　学生参加型授業の試み

第１節　課題の整理

(1)　2003年度、2004年度の経験

2003年度は、福祉経済とは何かといった抽象的な講義に前半の授業を使用し、後半は授業の都度、学生に雑誌や新聞等の切り抜きを配布し（テキストは指定しなかった）、毎回グループを編成して授業時間内に討議と報告を行った。この方法はグループも資料も毎回変わるため、資料を読み討議する時間を充分確保できず、したがって学習意欲を引き出せず、報告はおざなりな内容となった。また、個別的な事例を除くと、受講生全体の学習の継続性が確保できず、学生が自発的に学び合う関係は授業時間内の形式的なものとしかならなかった。

したがって2004年度は、テキスト『豊かさの条件』を指定し、グループはゼミ別に編成、固定した。テキストの章立てにそってゼミ別担当カ所を決め、授業時間以外で討議し報告の準備（レジュメの作成も含む）をするよう口頭で指導した。だが、報告の仕方の細かい指示や例示を聞き流してしまい、結局、各ゼミとも担当カ所をさらに細分化して学生各自に担当カ所を割り当て、各自がテキストを読んで・まとめて・書いて・印刷したレジュメを棒読みするだけという単調なものになってしまった。

だが、少なくともゼミの担当カ所を読んでから各自の担当カ所の報告をしており、よく読み練られた内容

1）本学では昼間部をⅠ部、夜間部をⅡ部と表現するが、本誌は一般に公表が前提とされているため、本稿ではわかりやすく昼間部、夜間部と記す。

2）本学昼間部では、全学生を6ゼミに分割し1ゼミ約20名、1・2年合同のゼミである。「福祉経済論」は2回生配当の選択科目で、結果的に8～10名ずつの6ゼミで構成されていた。

の報告も散見された。また、テキストの内容が学生の潜在的な問題意識に合致し、報告の仕方（声の大きさや内容のわかりやすさ）によっては、報告者と受講生との呼応関係が感じられる場面もあった。

(2) 課題の整理

2005年度はこれまでの経験を踏まえ、学生が参加する授業となるよう、先述した学生集団の特徴と条件ⅰ)、ⅱ)、ⅲ）を生かしつつ次のように課題を整理した。

Ⅰ） 学生が自発的に学び合う関係を構築する。

この課題に対しては、固定的な集団であるゼミ別学生グループとした。このグループは、毎週のゼミで顔を合わせる（学びあう）関係であり、ゼミ連絡網を通じて連絡のとりやすい関係にある。このことは、学生と学生が呼応し、自発的に学び合うための基盤となりやすい。

Ⅱ） 学生の学習意欲を引き出す。

学習意欲は潜在的な問題意識から引き出されるであろうことを前提に、それに合致する『豊かさの条件』を引き続きテキストとして採用した。さらにテキストへの導入及び授業内容のイメージを膨らませるため、最初の2講は教員が行った。第1講目ではテキストの目次及び「はじめに」からその全体像を紹介し、第2講目では拙論[3]及びビデオ[4]を使用して福祉と経済の関係を講義した。

Ⅲ） 授業への参加度を高める。

授業で出欠をとることは義務づけられているが、単純な出席ではなく参加度を高めるためには、別の方法で多少の“仕掛け”を必要とした。それをゼミ別学生グループの報告が授業の中心となるよう、とりわけ報告の仕方を口頭ではなくレジュメ(表1)で説明した。この点については後述する。

尚、これら課題を実践するにあたって、受講教室について若干言及しておく。受講教室は、本学で「中教室」と言われる70～80名収容の縦長の講義室で、分散して着席すると著しく集中度が低下する。そこで、後方から3～4列には座らないように指導し、授業への集中が分散しないように留意した。ちなみに、指示したわけではないが、報告を担当する学生たちは教卓の両脇に机とイスを配置し受講生に向かい合って着席した。

第2節　2005年度の試み

最初の“仕掛け”は、報告の仕方（注意事項）を示したレジュメである（表1）。学生がゼミ別グループ討議に参加せざるを得ない状況をつくり、学生が自発的に学び合わざるを得ない関係へとつなげ、それが自然に学習意欲と授業への参加に結びつくよう意図して作成した。いくつかの特徴をあげると次の通りである(以下、表1参照)。

例えば、報告事前準備の3.-③「ゼミの学生それぞれがこれだけは読んでほしい、考えてほしいと思う内容を明確に」及び報告の3.「ゼミの学生全部が参加したことが明確になるように」では、発表と報告を誰かに任せて適当に参加するという行為が成り立たなくなるようにした。

加えて、報告事前準備の5.-②「時間配分（50～60分)」の持ち時間を与えた。そうなると、グループの学生全員が参加して何かを報告しないと授業時間を保たせることができない。さらに、報告に対する評価の1.「報告の仕方や内容を以て、ゼミ生全員を評価する。つまり連帯責任」を問い、同2.の後半にあるように「つまり居眠りする学生がいたら報告する側のポイントが下がる」ため、何とかして受講生が集中できる「50～60分×2コマ」の授業をこなさなくてはならなくなる。受講する学生にとっても、必ず自分が報告する順番がくるので、他のグループの報告を無視するわけにはいかなくなる。

そのかわり、「50～60分×2コマ」を保たせるためのヒントとして、報告事前準備の5.-③の後半「受講生に質問をしていく」ことで、報告者が質問を受けるばかりが報告ではないことを示唆した。これは受講生を授業に集中させる意味でも効果がある。だが、ここで次のことを徹底しておくべきだった。それは、「何か質問ありませんか？」を言ってはいけない、ということである。この質問の仕方は、最も質問の出にくい

3）川口啓子「ノーマライゼーションを支えるもの」『月刊保団連』全国保険医団体連合会、1989年11月 No.319所収。日本と北欧の福祉制度を比較した小論で、若干古いが、筆者の体験（アルツハイマー病の母の在宅介護）に基づいているため、リアリティに富む内容になり、介護福祉士をめざす学生にとっては多少とも身近に感じ理解しやすいと思われる。

4）MBSテレビ「現代を生きる－老人性痴呆症・ケアの道－」(1990年)。上記拙論にある筆者の母（アルツハイマー病）を在宅で介護する父と弟が取材され、放映されたもの。

表１　昼間部　福祉経済論　2005年度授業計画

2005/04/21

日程	予定内容	報告			
① 4/14	はじめに	教員	⑨ 6/16	4）NGOの活動と若者たち①	D ゼミ
② 4/21	ノーマライゼーションを支えるもの		⑩ 6/23	4）NGOの活動と若者たち②	
③ 4/28	1）切り裂かれる労働と生活の世界①	A ゼミ	⑪ 6/30	5）支えあう人間の歴史と理論①	E ゼミ
④ 5/12	1）切り裂かれる労働と生活の世界②		⑫ 7/7	5）支えあう人間の歴史と理論②	
⑤ 5/19	2）不安な社会に生きる子どもたち①	B ゼミ	⑬ 9/8	終章）希望を拓く	F ゼミ
⑥ 5/26	2）不安な社会に生きる子どもたち②		⑭ 9/15	終章）希望を拓く	
⑦ 6/2	3）なぜ、助け合うのか①	C ゼミ	⑮ 試験	（アンケート式レポート）	
⑧ 6/9	3）なぜ、助け合うのか②				

報告　事前準備

1. **読む。**各自、重要だと思うところに線を引きながら、担当の章は全部読む。余裕のある人はテキスト以外に参考になる文献や新聞記事などを紹介する。
2. **議論する。**それぞれ重要だと思ったところを報告しあい、自由に議論する。イメージを膨らませる。なぜ、を常に問い続けて答えを見出そうと試みる。
3. **報告内容を決める。**①その章の要約。②特に議論したところの紹介とその内容。③ゼミの学生それぞれがこれだけは読んでほしい、考えて欲しいと思う内容を明確に。
4. **レジュメを作成する。**①ゼミ名、学生名、報告内容のタイトルを明記。②A4用紙4枚以内。③レジュメの書き方は自由（但しわかりやすいように）。④55部印刷。
5. **報告の仕方を決める。**①報告者と司会。②時間配分（50～60 分）。③質問の取り方（質問を受けるばかりではなく受講生に質問をしていくことも重要）。
6. その他**必要と思われる工夫**（学生に集中させる方法、考えさせる方法、発言させる方法など）。

報告

1. **司会者の仕切り。**①レジュメ配布、確認。②だれが何について報告するのかを紹介。③集中させる。④教員にあいづちを求めない。
2. **報告者による報告。**①大きな声。②ゆっくり。③はっきり。④堂々と自信を持って。
3. ゼミの学生全部が参加したことが明確になるように。
4. 受講生全員の**参加度を高める**（スタンツやレクレーション活動と同じ。興味を持続させる。すべらない）。
5. 当然のことながら、教員に報告するのではなく、**受講生に教授**する。

報告に対する評価

1. 報告の仕方や内容を以て、ゼミ生全員を評価する。つまり**連帯責任**。
2. **評価のポイント**は、声の大きさ、わかりやすさ、内容の深さ、集中のさせ方など（つまり居眠りする学生がいたら報告する側のポイントが下がる）。
3. 前期試験はたぶん**レポート**。みんなが報告、議論した内容を大切に。

方法だからである。授業の後半に入るにつれ、当初の「受講生に質問をしていく」ことを忘れがちになり、「何か質問ありませんか？　なければ終わります」が増えていった。事実、報告を控えた学生には事前に注意を入れておいたが、だれか一人がそう言ってしまうと、そのまま流れてしまうことが幾度かあった。

さて、教員との関係では、報告の1.-④「教員にあいづちを求めない」を強調した。教員を見て、これでいいかどうか、終わってもいいかどうかを求めてしまう傾向を排し、学生が受講生であること、教員に報告するのではないことを徹底した。残念ながら、一人だけ「報告、こんなんでいいん？」と、教員に同意を求めた学生がいたが。

さらに報告事前準備の6.「その他必要と思われる工夫」では、スライドやビデオの使用、アンケート調査、受講生へのレポート課題など、報告の方法はレジュメや板書だけではない多様性を示唆した。この点は、どのゼミグループも工夫を凝らして応えてくれた。また、この点こそ、課題のⅠ)学生が自発的に学び合う関係を構築する、絶好の機会になっていたように思う。

以上のような試みを効果的にするために、報告の4.の後半「すべらない」という提起も重要であった。この点について教員に必要な実践は、当該授業時間外に学生が集まっている時、「すべるなよ」、「しけるなよ」と、時折、ラフな声かけをすることである。学生にとってこれらの言葉はイメージしやすく、彼らのやる気を煽るような“仕掛け”として作用する。

報告する側の学生にとって「すべるなよ」というのは、受講生に「受けなければならない」ことを意味する。つまり、彼らにとって「すべる」のは恥ずかしいことであり、「受ける」（受け入れられる）報告をしなければならないことになる。同様に、「しけた」授業とはつまらない授業のことであり、通常は学生が教員に投げかける授業評価の常套句である。したがって「しけるなよ」ということは、教員への常套句だったはずの言葉が報告する学生自身に返されることを意味し、つまらない報告はできないというプレッシャーになる。

第3節　報告する側の学生の状況

(1)　全体的状況

最初に報告を行うAゼミがその後の報告の善し悪しを左右する。そこで、Aゼミには、当初から彼らの問題意識に比較的近い第一章「切り裂かれる労働と生活の世界」の担当を依頼した。具体的には、この章にホームレスを取り上げた箇所がありホームレスを卒業研究テーマにしている学生がいたこと、またAゼミが全体として個別臨床的なテーマではなく、法や制度を含む包括的な視野で社会問題をとらえようとしている学生が多かったためである。

初回報告までの準備期間は2週間ほどであったが、Aゼミは、空き時間、放課後等を使用してグループ討議を行った。そして、彼らは筆者の予想を超えた内容の濃い報告を行った。ここで、課題のⅡ)学生（とりわけ受講生）の学習意欲を引き出す“仕掛け”が成功した。

B～Fゼミは担当の章を希望にそって決めたが、Aゼミの影響を受けてつまらない報告でごまかすわけにはいかなくなった。ここに、教員の声かけ「すべるなよ」、「しけるなよ」が生き、良い意味での競争意識が生じた。そして報告が後になるゼミほど、どんな報告をどのようにすればよいかを学生どうしで考えざるを得なくなった。ここで、課題のⅠ）自発的に学び合う関係の構築が始まり、結果、各ゼミとも1ヶ月ほど前から報告準備に取りかかり、工夫を凝らした報告に結実していった。

自分たちが報告の日、学生たちは、9:30開始の授業であるにも関わらず9:00に集合し、レジュメ印刷、必要事項の板書、机・イス等の配置、ビデオなど機材の準備を授業開始前までに行い、受講生が揃うのを待つこととなった。そうなると、自ずと受講生の不参加状況（居眠り・私語・ケータイ・内職など。以下、不参加状況と記す。）が目立たなくなり、結果的に課題のⅢ）授業への参加度が高まったのである。

(2)　各ゼミの報告の特徴

各ゼミとも、原則的には表1の報告事前準備の3.に示した「①その章の要約、②特に議論したところの紹介とその内容、③ゼミの学生それぞれがこれだけは読んでほしい、考えてほしいと思う内容を明確に。」にそって報告している。したがって、以下では主としてゼミ独自の報告について紹介する。とりわけ下線部は、学生が独自に工夫をこらした部分である。

＜Aゼミ＞第1章　切り裂かれる労働と生活の世界

グループ討議を通して、学生が考えたサブタイトル「生活するに、まず考えること。それは収入。収入は働かなければ得られない」をつけた。そして、彼らの

問題意識に応じてキーワード（フリーター、ホームレス、社会保障、政治の人権感覚の喪失）を考え、テキスト以外の文献も読み、ホームレス・フリーター・ニートの実態から労働観、社会保障観を深める正攻法の報告を行った。若者50人へのインタビューを通じて、現代の若者には労働観が築けていないことを問題提起した。

＜Ｂゼミ＞第2章　不安な社会に生きる子どもたち

日本の学校文化を変革する必要があるのではないか、という問題提起から始まり、日本とドイツの学校制度（図式化した資料を添付）およびそれに伴う学校文化の違いを報告した。ここでは学生自身の小・中・高校での経験から多様な意見を交換することができた。学生たちは、テキストに紹介されているドイツの小学校における「『１』の授業」を参考に、受講生に「『１』の宿題」を課した。2コマ目の報告では、学生の脚本による「『１』の授業」の模擬授業が行われた。

＜Ｃゼミ＞第3章　なぜ、助け合うのか

「いじめ」を主要なテーマとして取り上げた。報告は海外の「いじめ」に関するビデオ紹介[5]から始まり、「いじめ」が日本だけではないことを訴えた。続いて、学生の体験談をふまえ、事前に行われた「いじめ」に関するアンケート（受講生対象）の結果を報告した。その報告では、学生が作成した「いじめ」の概念図と「助け合い」の概念図が対置して示された。

＜Ｄゼミ＞第4章　NGOの活動と若者たち

コソボの難民救援活動に携わるNGOと日本の学生たちのボランティア活動について、助け合うことについて大局的に議論している。１コマ目では、事前に調査したボランティアに関するアンケートの結果を報告した。また、NGOについては、実際にNGO活動家へのインタビュー[6]を行い、授業中にその模様を再現した。各々の報告では、報告者から受講生への質問や問題提起が行われている。また、参考文献も５冊[7]あげられていた。

＜Ｅゼミ＞第5章　支えあう人間の歴史と理論

市場原理が支配する資本主義社会では、福祉の業界でも営利追求が余儀なくされているのではないかという問題意識のもと、その対抗軸としてテキストで紹介されている生活協同組合について深く言及した。就職活動を開始している学年でもあることから、「これから就職するにあたって良い条件とは」のテーマで授業内に小グループ討議を行わせ、その結果を集計して2コマ目に発表するとともに、学生自身の脚本と絵による紙芝居（サザエさん）を制作し、生活協同組合の歴史[8]をスライド上映した。

＜Ｆゼミ＞終章　希望を拓く

『豊かさの条件』の締めくくりであり、「豊かさとは何か」を問い直す内容となった。最初の授業では、どのようなときにどのような内容（人・モノ・etc.）で豊かさを感じるか、というアンケートをとり、次の授業で報告があった。さらに学生たちが制作したビデオ（ドラえもん）が上映され、「豊かさが感じられない原因（例えばストレス）を排除して豊かさを得たつもりが、かえって豊かさにはつながらなかった」という逆説的結論を示して最後の発表を締めくくった。

以上、2005年度「福祉経済論」ゼミ別学生グループの報告は、2003年度、2004年度には予想もしなかったような工夫が行われた。報告内容は稚拙な部分も残るが、学生たちは多少なりとも学び合う関係を構築し、自分たちが結集した力量を発現して見せた。

第４節　受講する側の学生と教員

(1)　受講生の状況

9:30開始と同時に教員が出席をとる。出席状況は表2（2005年度）の通りである。出席簿を呼び終わってから入室した学生は、公共交通機関の遅れ（延着証明を出す）でない限り遅刻の扱いとする。当然とは言え、１時間目であることを考えると学生にとっては厳しい

5）いじめに関する海外の事例を集めた特集番組のビデオであるが、学生が探してきたもので、制作局、放映日時、タイトルなどは不明。

6）堺市民活動コーナーの代表理事でNGO法人SEIN代表でもある湯川まゆみさんに電話インタビューを行った。

7）学生たちがあげた参考文献は次の通り。

最上敏樹『人道的介入』岩波書店　2001年10月。

金子郁容『ボランティア』岩波書店　1992年7月。

浦野由美子『難民－ふるさとを追われた人々－』ポプラ社　2003年4月。

大野芳野『コソボ破壊の果てに』講談社　2002年6月、『コソボ絶望の淵から明日へ』2004年4月　岩波書店。

8）日本生活協同組合連合会HP（http://www.co-op.or.jp/jccu/）及びいずみ市民生協(http://www.izumi.coop/)などから生協の歴史（ロッヂデール公正先駆者生協の創設）を学び脚本化した。

出欠確認である。

また、授業中は報告を担当したゼミの学生が交替で教室の後ろのほうへ行き、遅刻者へのレジュメ配布、私語や居眠りの注意、また前方への着席を促すなど「監視体制」をとった。「監視体制」の善し悪しは別として、受講生の不参加状況が減少し、授業への集中度は高くなった。報告する側の学生は、報告後に質問がない場合に受講生を指名してコメントを求めることがたびたび行われたため、受講生の側も安易に「わかりません」、「聴いていませんでした」等とは答えにくい雰囲気がつくり出されていった。

もちろん、不参加状況が皆無だったわけではない。ただ、堂々と私語や居眠りがあった2003年度や、当然のようにケータイと内職に夢中だった2004年度に比べると、テキストを広げて線を引く姿も多く、報告者が真剣に報告し質疑応答が活発になってくると徐々に授業へ集中していった。うつむいていた学生が顔をあげ、ケータイや内職の存在を忘れ、報告者の発言に思わずうなずいている。数字によるデータは出しようがないが、教員なら誰もが感じる学生の表情や場の空気は、過去2年間とは全く異なる。少なくとも、教員が声を荒げる必要はなかった。

(2) 授業中の教員の役割

教員は出席をとった後、マイクを学生に渡し教室の後方に着席する。必要に応じて、マイク音量の調整やビデオ機器の操作などを手伝う。学生の報告が終わると、教員は、報告内容に呼応する資料を配布して話題提供を行い、報告の内容を一歩踏み込んでまとめるようにした。教員の持ち時間は、毎回20分ほどである。尚、各ゼミの報告に対して配布した資料等は次の通りである。

＜Ａゼミ＞第1章　切り裂かれる労働と生活の世界

某学生のアルバイト給料明細[9]を配布した。給料から所得税、社会保険料等が引かれることを確認しながら、新聞の切り抜き「生活破壊すすめる小泉大増税、急増する生活不安」[10]を使って補足的な講義を行った。

＜Ｂゼミ＞第2章　不安な社会に生きる子どもたち

テキストに紹介されている「『1』の授業」、学生の「『1』の模擬授業」、学生からの「『1』の宿題」にちなんで、『1秒の世界』[11]からレジュメを作成。1秒間に地球ではなにが起こっているか、「1」のイメージをさらにひろげてみた。

＜Ｃゼミ＞第3章　なぜ、助け合うのか

マリー・ローランサン（画家、詩人）の詩『鎮静剤』（堀口大學訳）を配布。詩の最終行「死んだ女よりもっと哀れなのは忘れられた女です」に空白部分（左記、下

表２　2005年度の「福祉経済論」出欠状況

遅刻回数	人数	欠席回数	人数
無遅刻	27	無欠席	26
1回	11	1回	13
2回	6	2回	11
3回	3	3回	4
4回	3	4回	0
5回以上	2	5回以上	1

（単位は人）

＊無遅刻27人、無欠席26人のうち、20人が無遅刻無欠席である。

＊30分以上の遅刻は欠席扱いとなるが、2005年度は遅れてでも出席する傾向があった。

9）企業名も学生名も特定できないようにしているが、受講生の一人の給料明細であり、説明にリアリティがでてくる。蛇足だが、社会保障制度や福祉国家の説明、各自が社会の一員であることの説明などにはへたなテキストより給料明細のほうがわかりやすい。

10）『大阪保険医新聞』大阪府保険医協会、2005年4月5日（第1527号）。

11）山本良一責任編集 Think the earth プロジェクト編『1秒の世界』ダイヤモンド社、2003年7月（同年6月初版）。

線部）をつくりそこに入る言葉を考えながら、その詩が描く人間の存在について、学生に問いかけた。

＜Dゼミ＞第4章　NGOの活動と若者たち

NGO活動にちなんで、レジュメ「今さら聞けないアルファベット略語の本当の意味」[12]を配布。NPO、WHO、PKO、UNICEF等に加えて、MVP、UFO、SMAP等の遊びも入れてみた。また、国連環境サミットでの演説『あなたが世界を変える日』[13]のスライド上映を行った。

＜Eゼミ＞第5章　支えあう人間の歴史と理論

「人間社会の4つの原理」[14]（自助・自立、協同、共同、市場）を配布し、4つの原理の関係性について言及した。市場の競争原理によって駆動する資本主義的生産様式が人間社会の4つの原理のなかで肥大化してバランスを失い、今日の拝金主義に結びついていることを講義した。この章は学生にとって難しい章でもあったが、教員の説明も抽象的になりがちで、そのとたんに受講生の不参加状況が目立ってきたことはまだまだ反省を要するところである。

＜Fゼミ＞終章　希望を拓く

夏休み明け授業であったため、学生の集中度が落ちた。そこで、『豊かさの条件』に底流する雇用問題を学生の就職・進路問題と結びつけ仕切直しを計った。新聞の切り抜き「白い履歴書就職阻む」[15]を配布し、「とにかく就職か進学すること。自分探しは仕事をしながらでもできる。フリーター、ニートは絶対にダメ」と主張した。後になって就職に迷っていた学生から、「私のことを言われているようだった」と言ってきた。

ゼミ別学生グループがどのような報告を行うかは、教員には当日までわからない。そのためテキストから推測して、報告に呼応する内容の資料を準備することになる。したがって、学生の報告に一歩踏み込んでいるか、学生が最も伝えたい内容を汲みとっているかという点では不十分さが否めないが、そこは教員の気合いとパワーで補うしかなかった[16]。

第3章　評価をめぐって

第1節　定期試験レポート

定期試験は、授業評価のアンケートを含むレポートとした。レポートは、感想や自己理論の展開で終わらないよう、テキストやこれまでの授業のレジュメを見直して要約または引用を書く形式になっている。そうすることによって、学生は部分的でも本をめくり、本の丸写しであっても読むことになる。これは、試験も15コマ目の授業として学習させる“仕掛け”である。

また、アンケートでは、どのゼミの報告が良かったか、誰の報告が良かったかなど、学生による学生の評価を書かせている。学生は、具体的なゼミ名・学生名を記入することで報告されたレジュメを見直し、授業の記憶を想起することになる。そこから新たな連想や記憶の更新につながる。その際「誰と相談しても良い」ことにして、学生どうしが会話を通じてさらに学んだことを想起することを期待している。

尚、このレポートによる成績評価は、著しく量的に乏しい場合及び不誠実な記述を除いては内容の優劣は問わないことにした。

第2節　アンケートにみる学生の授業評価

レポートの授業評価に相当する部分は以下の通りである。紙面の都合上、一部分のみ紹介する。

今回のような「ゼミ別の報告で進めるという授業の仕方は良かったか」という質問に対しては、OK（23人）、まあまあOK（15人）、講義中心の授業よりいい（10人）、講義の方がいい（1人）、あまり良くない（1人）、NG（1人）、無回答（3人）という結果になった。前者3つを合わせて48人で、約90%の学生が肯定的に

12）筆者が、外来語辞典などからよく耳にする略語（25個のアルファベット略語の英語と日本語）を紹介した。

13）セヴァン・カリス＝スズキ著、ナマケモノ倶楽部編・訳『あなたが世界を変える日－12歳の少女が環境サミットで語った伝説のスピーチ－』学陽書房、2003年12月。
本書は絵本のようなつくりで、本文は6分間のスピーチである。授業中に本書をスライドのように上映しながら全文紹介ができる。これは本学夜間部の「福祉経済論」の際、学生がスライド上映をしながら読むことを提案、実行したもので、昼間部では教員が行ったものである。

14）日野秀逸『保健・医療と協同組合を学ぶ』日本生協連医療部会（通信教育テキストコースⅣ第1分冊）pp.22-45。

15）『朝日新聞』2005年9月4日付（朝刊）「争点を歩く／仕事　増え続けるニート」

16）学生の報告に応えようと思う教員の身体・姿勢などからあふれる意気込みは重要である。
これについては、斉藤孝『教師＝身体という技術』世織書房、2002年5月（1997年初版）を参照してほしい。教師という身体を呼吸や技でとらえ説明する本書は、ボディランゲージを遙かに超えた身体コミュニケーションの理論である。授業という場の空気をどう形成するかという問に対して、筆者にとってはモダンダンスのレッスンという身体的経験を軸に、斉藤の説には文字通り身体で納得できる（腑に落ちる）ことが多々ある。

評価した。尚、否定的評価の理由は、ゼミ別の集まりに負担を感じる、講義で知識を得たいなどであった。

また「どのゼミが印象に残ったか」を聞いたところ、報告の仕方や順番による印象の深浅もさることながら、学生たちのこれまでの経験から想起しやすい内容、即ち教育制度や学校生活に関する章(2章、3章)を扱ったゼミが最も印象に残っていた。学生たちの潜在的問題意識を教員はどのようにキャッチすべきか、そのヒントがここにあるように思われる。

さらに「ゼミ別の報告で進める授業」と「教員の講義を中心とした授業」を比較して記述させたところ、長所は、前者では「多くの学生の考え方を知ることができる」、「授業に興味が持てる」、「自分が勉強しなければならない」等の意見が多く、後者では「授業の内容が正確で深くなる」、「専門的知識を吸収できる」、「ポイントがわかりやすい」等があげられた。短所は、前者では「内容が深まらない」、「ゼミ別に集まる時間が無い」、後者では「受け身になる」、「寝てしまう」、「集中力が続かない」などがあげられた。今回のような授業が概ね肯定的評価を得たとは言え、いずれも一長一短があることを学生はよく見抜いている。

アンケートの全面的な集計・分析は後日の課題となるが、学生がどのようなアンテナを持ち、何に反応し、どのような学習を望んでいるのかなどを見出さねばならない。

第3節　当該授業の自己評価

これまで述べてきたように、過去の経験から刷新が迫られていた「福祉経済論」は、これまでの授業に比して学生の参加は確かに良好になったし、学生からの評価も概ね肯定的であった。これは筆者の経験則に基づく結果でしかないが、及第点と考えたい。

ただし、他の授業との比較や本学教育カリキュラム全体の中での分析や考察となると、その材料も基準も全く準備できていない。さらに、シラバスに示した授業の目標に対して学生個々の知識や力量の到達段階を明確に把握しにくく、課題も山積みである。

第4節　学生の個別評価の方法

今回の試みで、最も困難だったことは学生の個別評価である。第2章第2節で述べたとおり、当初はゼミ別学生グループの連帯責任で評価すると言明した。だが、学生の個別評価をゼミ別学生グループの連帯責任で行ってよいのかという疑問は拭いきれない。授業での報告が立派であっても、授業時間外のゼミ別の学習に個々の学生がどれだけ参加したかについては把握できない。レポートには、消極的な学生への不満も述べられており学生の参加度に差があることは明らかだが、授業ではその部分が伝わりにくいのである。つまり、この授業の方法では個々の学生を総合的に評価する基準は安易に持ち得ないのである。

また、授業中の学習姿勢から参加度を把握することはある程度可能だが、やはり公正、平等に評価できるとは言い難い。結局、学生の個別評価が可能な客観的資料は、出席簿（出席／欠席／遅刻／その他[17]）だけであった。

以上のように、学生参加型授業に挑戦したものの、学生の個別評価はきわめて行いにくく、評価の考え方から方法にいたるまで今後の大きな課題として残ることとなった。

第4章　授業を終えて

授業を終えて痛感したことは、学生の学習要求は教員が考える以上に高く、問題意識は多様性に富み、感性も非常に豊かなことである。換言すれば、これまでいかに学生の学習意欲を引き出せていなかったか、いかに教員の従来の発想が貧困だったか、ということである。

教員の一方的な授業は、学生に響かない。教員の都合に合わせた「静かな」授業が良い授業とは限らない。どうすれば、学生が授業に参加するのか。今回、学生参加型授業をめざして試みた“仕掛け”は、確かに場の空気を変えた。そこには、学生と学生との呼応関係、教員と学生との呼応関係の形成があると考える。論理的に説明するにはまだ至らないが、呼応関係の形成は授業のあり方を決める重要なポイントであるように思われる。

したがって、筆者の授業も、毎年、学生に呼応して刷新が求められることになる。次年度もⅠ）学生が自発的に学び合う関係を構築し、Ⅱ）学生の学習意欲を引き出し、Ⅲ）授業への参加度を高めることが課題に

17）筆者は、不参加状況のチェックを出席簿につけているが、完璧、公平であるとは言い難い。ちなみに、前年度までと比較すると、2005年度の不参加状況は非常に少なかった。

なる。加えて、教員一人の発想の限界を打破するには他の授業との研究交流やカリキュラム上の位置づけの検討が不可欠になってくるだろう。

最後の授業の終盤、筆者は、Aゼミの学生から順番に起立してもらい各ゼミがどの章で何を報告したかを思い出してもらいつつ簡単なまとめをして授業を終えることにしていた。このとき筆者は、最後に拍手が起きるかどうかを、決して強要することなく、しかし意図的に“仕掛け”てみた。それは、学生への感謝と切れのいい終わり方につながる授業運びによって、教員と学生との呼応関係を拍手がでるかどうかで確認しようとしたものであった[18)]。

「今年度は、とても充実した授業になりました。ご協力ありがとうございました。終わります。」

この呼びかけに応じて拍手がでた。

授業は学生と教員との創造的時空間であり、学生生活の大半を占める。教員は各々の個性を生かした学生との呼応関係を築きつつ、授業を通じて彼らの人生途上の数年間に充実した何かを提供できなければならないはずである。

（かわぐち　けいこ　本学助教授）

18) この点については、昼間部より先に終了した夜間部の授業では失敗している。日常の授業における呼応関係の形成が不十分であったことと、終盤の授業運びの精緻さに欠けたためである。